Malory における語順と情報構造
― than または there に導かれる文を中心に―

小林　美樹

要　旨

本論文では Malory を資料とし、than または there に導かれる文における語順と情報構造の関係を考察する。Malory において there 構文に起こる動詞、また than の後ろで倒置を起こしやすい動詞は be 動詞と非対格動詞である。しかし動詞の意味に漂白化が起きたり、主語等他の要素との組み合わせで作りだされる情報構造が「意味の軽いものから重いものへ」という流れになっていれば、他動詞や非能格動詞も there 構文に現れたり、また than の後ろで倒置語順で現れたりするということを示す。また Malory において than や there の後ろに起こる受動文に関し、完全倒置語順と不完全倒置語順の選択要因を情報構造の観点から探る可能性について論じる。

1．はじめに

本稿は 15 世紀の *The Works of Sir Thomas Malory* (Malory) を資料として、ME 後期において語の持つ情報の重要度 (Information Value(IV)) が語順（SV 語順 /VS 語順）にどの程度関与していたのかを考察することを目的とする。OE 期において þa/þonne に導かれる文はほぼ V2 語順であったので、ME 後期の Malory においても than/then に導かれる文は他の副詞が文頭に立つ文よりも V2（VS 語順）のなごりが観察しやすいと考えられる。従って能動文については主に than に後続する節の語順に焦点を当て、情報構造と語順の関係を探る。また Malory の受身文における $Xv_{(AUX)}VS$ 語順（完全倒置）と

Xv(AUX)SV 語順（不完全倒置）の選択にどの程度文の構成要素の情報価値が影響しているのかということも観察する。このような受身文に関しては文頭の X が than または there である文に焦点を当てる。また比較の為に、than や there 以外の副詞が文頭に置かれる文も考察対象とする。

本論文の構成は以下の通りである。次節で ME 期の語順を情報構造の観点から扱った先行研究を概観した後、3 節で Malory における than に後続する節の語順を観察する。4 節で非能格動詞 there 構文、他動詞 there 構文、そして受身の there 構文を情報構造という視点から考察し、5 節でまとめをおこなう。

２．先行研究

２．１　Bjørnsen and Heggelund (2006)

Bjørnsen and Heggelund (2006) は Mandeville's Travel (MT) と Middle English Sermons (MES) を資料とし、LME の受身文において語用論的要因が語順の決定にどの程度関わっているのかを考察している。彼等は受身文の語順を SVX, SvXV, XSV, XVS に分類して観察しているが、その中で本稿に直接的に関係する XVS 語順の受身文についての考察を以下に紹介する。

彼等は XVS を (1) の様な完全倒置と (2) の様な不完全倒置に分け、主語の長さと主語の持つ情報価値が語順に与える影響を論じている。

(1) In þis prayour is conteyned more witt þan anny erthly man can tell (MES 10.20)　(Bjørnsen and Heggelund(2006:75))

(2) In þis wyze bene all good levers called þe frendes of God (MES 16.16)　(Bjørnsen and Heggelund(2006:76))

(1) では副詞的要素 X (In þis prayour) + be 動詞 + 語彙動詞 (conteyned) + 主語 (more witt þan anny erthly man can tell) という語順、一方 (2) においては副詞的要素 X (In þis wyze) + be 動詞 + 主語 (all good levers) + 語彙動詞 (called) (+ 補語 X (þe frendes of God)) という語順が観察される。すなわち、(1) では主語が be 動詞 + 語彙動詞という連鎖の後ろに置かれる完全倒置、(2) では主語が be 動詞と語彙動詞の間に起こる不完全倒置が見られる。

Bjørnsen and Heggelund (2006) の資料に完全倒置の受身文は 6、不完全倒置の受身文は 17 存在するということである。つまり倒置の受身文の中で完全倒置は 26,1％を占めることになり、この数値は 1480 年から 1730 年の文献を資料とした Bækken(1998:382) の研究結果（完全倒置は全ての倒置受身文の 28,4％）ともおよそ合致するとしている。

彼等によると完全倒置の受身文の主語は全て high IV であり、後置されたこれらの high IV 主語の後ろにさらに他の要素が後続する例は無いということである。これらの完全倒置受身文は全て、low IV の要素から始まり high IV 主語で終わるという end focus の原則にかなっており、また彼等の資料に見られる XSV 型の受身文の主語の平均語数が 2.2 語であるのに対し、完全倒置受身文の主語の平均語数は 5.3 語ということから、完全倒置受身文は end weight の原則にもかなっているとしている (Bjørnsen and Heggelund(2006:75))。

一方、不完全倒置受身文には high IV 主語も low IV 主語も起こるが、low IV 主語の方が多ということである。前掲の (2) は low IV 主語の例、(3) は high IV 主語の例である。

(3) In this cytee of Bethleem was Dauid the kyng born (MT 47.26)

(2) のような low IV 主語の不完全倒置受身文の場合、主語に後続する語彙

動詞の後にさらに high IV を持つ要素が来ることが多く、このような場合もやはり end focus の原則に従っているとみなすことができる。(2) においては主語である all good levers が low IV、補語である þe frendes of God が high IV、また (4) においては主語である þat feld が low IV、補語である the feld of god floryssch t が high IV と考えられる。

(4) And þerfore is þat feld clept the feld of god floryssch t (MT 46.7)

不完全倒置受身文の中で、(3) のように high IV 主語が語彙動詞より前に来る構造は end focus の原則に従わないように思われる。これについて彼等は、このような構造においては語彙動詞の方が主語よりも高い IV を持っている可能性があるという Bækken(1998) の主張に言及している。しかし語彙動詞の IV は彼等の研究対象ではなく、(3) のような文についてこの観点からの分析は行われていない (Bjørnsen and Heggelund(2006:77))。

確かに主語やその他の要素 X が持つ IV は、新情報・旧情報のような観点から基準を定めて判断することが可能と思われるが、あらゆる動詞の IV を客観的に判断できるような基準を定めることは難しい。本稿で扱う there に導かれる受身文の完全倒置・不完全倒置についても、動詞の IV まで視野に入れた end focus の考察が望ましいと思われるが、それは今後の課題とし、本稿では動詞の IV も考慮に入れつつ、主に主語の IV に焦点を当てて考察を行う。

Bjørnsen and Heggelund(2006:77) は end focus の他、end weight の観点からも完全倒置受身文と不完全倒置受身文を論じている。彼等の研究によると、XSV 型の受身文の主語は平均 2.2 語、XVS 型のうち不完全倒置受身文の主語は 2.8 語、完全倒置受身文の主語は 5.3 語ということである。つまり主語が後ろに置かれるほど、その主語の語数は多くなっている。

XVS 型受身文についての彼等の考察は以下のようにまとめられる。

① end weight の原則がこの構文の語順に関与していた可能性がある。

② end focus の原則は XVS 型のうち完全倒置受身文においては語順の決定に関与していたと思われる。しかし XVS 型における主要なタイプである不完全倒置受身文においては、low IV 主語も high IV 主語もどちらも助動詞と語彙動詞の間という同じ位置に現れることから、end focus の原則が語順の決定的要因ではなかったと考えられる。

２．２　Martínez-Insua and Pérez-Guerra (2006)

Martínez-Insua and Pérez-Guerra(2006) は LME から PDE までに現れる there 構文をコーパスを使用して通時的に調査・研究した論文である。その中で、前節で扱った受身文に関して触れた end weight, end focus, 動詞の IV に関する考察を以下にまとめる。

there 構文に起こる動詞の中で be 動詞の占める割合は、LME, EModE（I 期、II 期、III 期）, LModE, PDE と時代を追うごとに 70,9% から 99,3% へと増加している。be 動詞以外の自動詞は LME で 21,5%、他動詞は EModE の I 期で 21,1% であり、現代英語とは異なり、be 動詞以外の動詞が there と共起する頻度が高い時期が存在したことがわかる。しかし自動詞の多くは remain のような内包動詞や疑似内包動詞であり、また他動詞が現れる場合、そのほとんどが受動態である[1] (Martínez-Insua and Pérez-Guerra(2006:199))。

彼等は there 構文に起こる動詞は意味内容の軽い動詞であるとしている。「行為」を表す他動詞も受動態になることにより「結果状態」に焦点が当たり、意味的無色化が起きる。この結果、他動詞も there 構文に起こる動詞の一般的特徴を備えることになる。

また end weight に関しては以下の様な見解を示している。there 構文において動詞の後ろに起こる主語の平均語数は 7.3 であり、Pérez-Guerra(1999：

56) に報告されている動詞に先行する無標の名詞主語の平均語数 3.01 と大きな開きがある。その意味においては end weight の原則が there 構文の語順に関与していると考えられる。しかし、話題化などで前置された主語以外の要素の平均語数は 5.6 (Pérez-Guerra(1999：108)) であり、このような文頭におかれた要素の語数と there 構文で動詞の後ろに置かれた主語の語数に顕著な差が見られるわけではないことから、end weight の原則は there 構文の語順についての決定的要因ではないであろうと述べている (Martínez-Insua and Pérez-Guerra (2006:200-201))。

彼等は there 構文の特徴は end weight よりも、情報の焦点を文末に置くという情報構造にあるとしている。LME と EModE は the Helsinki Corpus of English Texts (HC)、PDE は the Lancaster/Oslo-Bergen Corpus of British English (LOB) を資料として調査した結果から、これらの時期の英語において there 構文に現れる主語の主要部は 90％以上が新情報を担うものであることが示されている。また、there 構文において前置され文頭に置かれた要素の 51.5％が旧情報を担っているという Pérez-Guerra(1999:111) の調査も考え合わせ、一般的に there 構文は end focus だけでなく、given-before-new（「旧情報から新情報へ」）という原則にもかなうものであると述べている。そしてこのような情報構造という観点から見た場合、there 構文は歴史的に大きく変わっていないということも指摘している。

また Martínez-Insua and Pérez-Guerra (2006) は there 構文に関して盛んに議論されてきた definiteness effect（定性効果）についても通時的な観察を行っている。彼等の調査によると、there 構文の主語として起こる定名詞句は LME で 4.3％、EModE の I 期で 8.6%、II 期で 13.4％、III 期で 4.2％、LModE で 10.4%、PDE で 5.9％であり、定名詞句は英語の歴史を通して there 構文に起こっていることが理解できる。また 1 割以上の確率で there 構文の主語が定名詞句である時期（EModE の II 期と LModE）が存在していたことになる。

彼等は there 構文の主語にかかる制約は、それが形式的に定名詞句であるかどうかということよりも、その指示対象が聞き手に対して新情報として（再）提示するに相応しいかどうかということに関するものであるという見解を示している[2]。

２．３　Kemenade and Westergaard (2012)

Kemenade and Westergaard (2012) は ME の語順を情報構造の観点から扱った論文である。彼等が研究対象とするのは ME であるが、その前段階の英語については以下のようにまとめている。OE と EME では疑問文と、否定辞に導かれる平叙文においては必ず V2 語順が守られており、また þa/ þonne(then) に導かれる文でも V2 語順が原則である。このような V2 の他に、主語が代名詞かそれ以外の名詞句かでその主語の起こる位置が変わる、別のタイプの V2 も観察される。

(5) On twam þingum hæfde **God** þæs mannnes sawle gegodod
in two things had God the man's soul endowed
'With two things God had endowed man's soul'
(ÆCHom I, 1.20.1)

(6) Be ðæm **we** magon suiðe swutule oncnawan ðæt …
by that we may very clearly perceive that …
'By that, we may percieve very clearly that …'
(CP 26.181.16)
(Kemenade and Westergaard (2012:92))

このような主語以外の要素 X（þa/ þonne 以外の語句）で始まる文においては、代名詞主語は多くの場合 (6) のように動詞より前に現れ、一方代名詞以外の

主語（名詞主語）はかなりの頻度で (5) にみられるように動詞の後ろの位置に起こる。

彼等は ME を 4 期に分け、主語を名詞主語と代名詞主語、動詞を助動詞と語彙動詞に分類し、さらに語彙動詞を非対格動詞、非能格動詞、他動詞に類別した上で語順に関する精緻な考察を行っている。そのなかで本稿が扱う than(then) の後ろの倒置に関連する記述を以下にまとめる。

OE と同様に ME 初期でも then グループ (then, now, thus) の副詞は高頻度で倒置を引き起こす。表 1 は文頭の副詞の後ろで動詞（他動詞または非能格動詞）[3] と名詞主語の倒置がどのくらいの割合で起きているかを示すものである (Kemenade and Westergaard (2012:105))。

表 1　副詞に導かれる文における名詞主語と他動詞または非能格動詞の倒置の割合

文頭の副詞	M1	M2	M3	M4
then グループ	82.8%	52.2%	37.8%	22.8%
then グループ以外	50.0%	32.8%	27.0%	20.5%

前述したように、OE と EME においては þa/ þonne (then) に導かれる文は V2 語順が原則であり、このことは表 1 が示す ME1 期の then グループの 82.8% という高い数値からも読み取れる。しかし本稿で扱う Malory が属する ME4 期になると then グループの後ろで起こる名詞主語の倒置比率は 22.8% まで下がり、then グループ以外の副詞の後ろで見られる倒置比率 20.5% とほぼ同じとなる。彼等は 14 世紀から 15 世紀において then グループの副詞の後ろではまだ 52% の割合で倒置が見られるという Warner (2007) の研究結果と上掲の表 1 の数値が大きく違うことに触れ、この相違は、彼等は動詞を他動詞と非能格動詞に限定して調査ているのに対し、Warner (2007)

では非対格動詞も調査対象に含めていることに起因していると説明している。そして 2 つの調査結果の数値の違いは V2 の消失は非対格動詞よりも他動詞と非能格動詞に関して早く進行したという彼等の見解を支持するものであるとしている。

また Kemenade and Westergaard (2012) は、文頭に置かれた際に名詞主語の倒置を引き起こす場合も引き起こさない場合もある幾つかの副詞を通時的に観察することにより、時代が新しくなるにつれて倒置の有無に情報構造が関わらなくなっていくことを示している。ME1 期からの例文である (7-8) は、同じ swa に導かれる文において新情報を伝える名詞主語は動詞の後ろ、また旧情報を伝える名詞主語は動詞の前に起こっていることを示しており、この時期に情報構造が語順に関し重要な役割を果たしていたという彼等の主張を例証している。(7) の主語である þe douel (the devil) は前の文脈に登場しておらず、新出であり、(7) は XVS 語順である。一方、(8) の主語である þa elmesse は既出であり、(8) の語順は XSV となっている。

(7) Swa haueð þe douel nih and onde to monne
so hath the devil envy and hatred toward man
'likewise the devil has envy and hatred toward men.'
(CMLAMB1,153.435)

(8) swa þa elmesse acwencheð þa sunne
so the alms quench the sins
'so the alms quench the sins' (CMLAMBX1,39.487)
(Kemenade and Westergaard (2012:107)

このように ME1 期においては、名詞主語と他動詞 / 非能格動詞の語順は名詞主語の担う情報価値に明らかに依存している。しかし ME3 期において

は状況は大きく異なる。Kemenade and Westergaard (2012:108-110) は ME3 期に関して so または yet に導かれる文を分析しているが、動詞の後ろに起こる主語が旧情報を表していたり、逆に動詞の前に置かれた主語が新情報を伝えている例が見られる。この時期になると主語の担う情報価値が主語位置の決定に体系的に関与しなくなったということが理解される。

表 2 は so に導かれる文で動詞が他動詞または非能格動詞である場合、名詞主語が新情報を担うか旧情報を担うかということが SV 語順と VS 語順の選択にどの程度関与していたのかを示すものである (Kemenade and Westergaard (2012:110))。

表 2　so に導かれる平叙文における名詞主語と他動詞または非能格動詞の倒置の割合

	M1	**M2**	**M3**
旧情報			
倒　置	0%　(0/32)	7.1%　(1/14)	36.4%　(12/33)
非倒置	100%　(20/20)	81.8%　(9/11)	53.2% (57/107)
新情報			
倒　置	100%　(32/32)	92.9%　(13/14)	63.6%　(21/33)
非倒置	0%　(0/20)	18.2%　(2/11)	46.8% (50/107)

ME 初期では名詞主語の情報価値が語順の決定の絶対的要因となっていたが、ME 後期になると前掲の表 1 に示されるように倒置語順が減少しただけでなく、主語の情報の重さが主語位置の選択に関わらなくなってきている。

また、本稿が考察の対象とする ME4 期においては、後続部に倒置と非倒置の両方が見られる文頭の副詞は so のみであり、この so に導かれる文にお

いては圧倒的に非倒置が多いということである。この時期に so の後ろの倒置を観察できるのは主に Malory においてである。彼等はこの作品では主語が固有名詞であることが多く、それが旧情報を担うと見るべきか、または既出の固有名詞であってもその人物を読者の意識に新たに登場させていると解釈し、重い情報を担うとみなすべきなのか、判断し難いと述べている。

次節では Malory における語順と情報構造について考察をおこなう。この時期でも比較的多く倒置を引き起こす then と there に焦点をあて、Kemenade and Westergaard (2012) が主に then グループ以外の副詞について考察している情報構造の変化が、OE と ME 初期において高頻度に名詞主語の倒置を引き起こしていた then グループについても同様に観察されるのかどうかを検証したい。

3．Malory における than (then) の後ろの語順

Kemenade and Westergaard (2012:110) は Malory における倒置の比率は少ないと述べている。確かに than/thenne に導かれる文においても Malory では SV 語順が多く見られる。しかし Fludernik (2000) が言うところの「ディスコースマーカーの氾濫」が Malory の特徴でもあり、than も there も多用される中、これらの語に導かれる文において多様な語順を観察することができる。本節ではまず始めに名詞主語の倒置について、次に代名詞主語の倒置について観察し、最後に受動文の語順について考察する。

やはり倒置語順が多いのは (9-11) に見られるように名詞主語と非対格動詞の組み合わせの場合である。

(9) Than **cam** in **sir Gawayne** wyth hys three sunnes …

(Malory 665: 16)

(10) Thenne **stood the reame** in grete jeopardy long whyle
(Malory 7:14)

(11) Than **wente dame Elayne** unto sir Launcelot
(Malory 501:26)

非能格動詞では say や speak など伝達動詞が倒置語順に起こることがある。

(12) Than **spake Igrayne** and seyde, (Malory 30: 29)

(13) Than **seyde the kynge** unto sir Launcelot, (Malory 641:42)

現代英語でも伝達動詞と名詞主語はいくらかの制約を満たせば倒置が可能である。他の非能格動詞の多くが V2 語順では見られなくなっていくなかで、このグループの動詞は OE 以来の VS 語順を今に伝えている。Malory においても他の非能格動詞が稀にしか倒置語順にならないのに対し、(12-13) のような伝達動詞の VS 語順は少なくなく、15 世紀においてこの動詞群が他の非能格動詞と異なる振る舞いをしていたことは明らかである。

(14) のような伝達動詞以外の非能格動詞が名詞主語と倒置を起こす例も見つかるが、文脈を検討すると、この文の存在をもってして非能格動詞が Malory において倒置語順に起こる動詞類であるとは言えないことが理解できる。

(14) Than **swore kynge Brandegoris of Strangore** that he wolde
brynge with hym fyve thousand men of armys on horsebacke
(Malory 17: 11-13)

(14) は文字通りにはブランドゴリス王が誓いを立てたことを述べているのであるが、この文は主語の指示対象を場面に導入する機能をもっている。

swore という非能格動詞が特殊な文脈の中で倒置語順で使われていることを示すために (14) の文脈を説明する。(14) は戦いの場で王達が次々に誓いを立てていく様が描写されている部分からのものである。まず (15) に示す文でキャンビネット公が誓いを立てる様子が記述されている。

(15) And the first that began the othe was the deuke of Canbenet,
that he wolde brynge with hym fyve thousand men of armys …
(Malory 17: 9-11)

この文の後で (16) に示すように、[than swore ＋ 主語] という同一構造の文で次々と王達が誓いを立てていく様子が描かれている。

(16) Than swore kynge Brandegoris of Strangore …
Than swore kynge Clarivaus of Northumbirlonde …
Than swore the Kynge with the Hondred Knyghtes …
(Malory 17: 11-15)

またそれに続いて [there swore ＋ 主語] という形が繰り返し用いられ、さらに他の王達を場面に導入している。このように同じ場面で繰り返し用いられることにより、’swore’ には意味の漂白化が起き、本来の非能格動詞としての性質は弱まっていると考えられる。

(14) や (16) に見られる非能格動詞の倒置は、’given before new’（「旧情報から新情報へ」）の原則に従った語順での新情報（次々に登場する王達）の提示と、繰り返し用いられることで起こった ’swore’ の意味の漂白化、非能格動詞としての性質の希薄化という点から説明できよう。

また少数ではあるが、(17) のような他動詞と名詞主語の倒置も見られる。

(17) Than **had sir Gawayne** suche a grace and gyffte that an
holy man had gyvyn hym (Malory 704: 8-9)

しかしこの文は「サー･ガウェインはある聖職者から恩恵を授けられていた」という意味であり、'had' は所有している状態を表すため、この動詞の他動性は低い。

伝達動詞を除く非能格動詞や他動性の高い他動詞に関しては、特殊な文脈を除いては Malory において既に SV 語順が基準になっていたと思われる。

次に代名詞主語について見ていく。Kemenade and Westergaard (2012) は疑問文以外の文において、ME4 期の代名詞主語と動詞の VS 語順は動詞が助動詞の場合 30.6%、他動詞または非能格動詞の場合 12.2%、非対格動詞の場合 17.2% であるという研究結果を示している。

表 3　代名詞主語と動詞の倒置

動詞の種類	M1	M2	M3	M4
助動詞	27.9	26.5	33.4	30.6
他動詞または非能格動詞	23.7	10.3	12.8	12.2
非対格動詞	26.9	11.8	15.3	17.2

(Kemenade and Westergaard (2012:100))

ME1 期では動詞が助動詞であるか語彙動詞であるかによる倒置比率の差は殆ど無いこと、ME 期中に語彙動詞の VS 語順が減少していく一方で、助動詞の VS 語順は 30% 前後であまり変化が無いことが示されている。

しかし本研究で行った Malory の地の文についての調査では法助動詞の倒置は多くは見られない。今回は会話文ではなく地の文を主な考察対象とした

が、Malory の「物語」という性質から、この作品においては会話文よりも地の文においての方が助動詞の使用が少ないと思われる。確かに会話文では (18-19) が示すように、than の後ろで代名詞主語と助動詞の倒置が観察される。

(18) 'Than **muste ye** go,' (Malory 221: 28)

(19) Than **wolde I** suffir you to departe frome me, (Malory 390: 1)

また than 以外の副詞の後ろでも代名詞主語と助動詞の倒置が起こる。(20-21) は副詞 now の後ろの代名詞主語と助動詞の倒置例である。会話の性質上、助動詞の倒置は名詞主語より代名詞主語との組み合わせが多い。

(20) 'Sir, now **muste you** deffende you lyke a knyght …'
(Malory 703: 10)

(21) 'Now **may ye** se,' (Malory 292: 3)

なお (22) が示すように、now の後ろで語彙動詞と代名詞主語の倒置も見られる。

(22) ' … Now **se I** that Thou holdiste me for one of Thy sevauntes.'
(Malory 596: 8-9)

もし Malory の会話文が文法変化の進み方の早い話し言葉の文法を反映しているのであれば、情報構造と語順の関係を考察するに際しても、地の文と会話文を区別して考察することにより、文法変化の異なる段階を観察することが可能と思われる。当然ながら会話と地の文では内容が異なり、また強調など倒置を引き起こす要因も異なるであろう。それぞれに現れる構文も限ら

れ、必ずしも平行した観察が可能ではないと思われるが、このような会話文と地の文の比較研究は有意義なものと思われる。会話文を含めた考察は今後の課題としたい。

次に代名詞主語と他動詞の倒置について考えたい。これまでの研究で代名詞主語は名詞主語よりも VS 語順になりにくく、また他動詞と非能格動詞は非対格動詞よりも早くから non-V2 が広まっていったことが指摘されている。その意味では代名詞主語と他動詞または非能格動詞の組み合わせは、最も倒置語順になりにくい組み合わせと考えられる。しかし (23) のような他動詞と代名詞主語の倒置の例も見つかる。

(23) Than **knew she** well hit was the same knyght that faught
for dame Lyonesse (Malory 220: 1-2)

(23) に現れる knew は他動詞であり、節を目的語として取っているが、意図的な行為を表す動詞ではなく他動性が低い。従ってこの例をもって「Malory の文法では他動詞も V2 語順に起こる」とは言い難い。

しかし (24) のような他動性の高い動詞の倒置文も存在する。

(24) Than **toke he** hys swerde agayne and put hit up in hys sheethe
(Malory 596:10)

この文の場合 ‘toke he’ の部分だけを見ると ’given before new’（「旧情報から新情報へ」）という情報の原則にはかなっていないが、目的語の情報が重いことを考えると、文全体としてはこの情報の原則に概ね添うような構造になっていると言えよう。英語が V2 から non-V2 へ移行していくという文法変化を研究する際、まずは他動詞、非能格動詞、非対格動詞といった形式的

な分類ごとの大きな流れを観察することが研究の土台作りとして肝要である。しかし様々な文脈の中に起こる文について、主語と動詞という組み合わせ以外の要因も視野に入れ、どのような要因がより強く語順に影響を与えていたのかを考察し、少しずつ進行する文法変化の混沌とした一面から様々な要因の力関係を理解するということも興味深いと思われる。

次に主語の長さという観点から Malory における倒置を考えると、主語の長さは語順の選択に関する主な要因ではなく、end weight の原則は than の後ろの語順について絶対的なものではなかったと考えられる。上で見たように than の後ろで短い代名詞主語の倒置が起こる場合もあり、また (25-26) が示すように、than に導かれる節において長い主語が倒置されずに SV 語順で現れる例も幾つか存在する。

(25) Than **<u>all the knyghtes and ladyes that were there</u> wepte**
as they were madde (Malory 696: 26-27)

(26) Than **<u>kynge Arthur and all the kynges and knyghtes</u>**
kneled downe (Malory 668: 33)

最後に than が受動態の文を導く例を見てみよう。次節で考察する there に導かれる文においては完全倒置の受け身文が少なくないのに対し、than の後ろにおいては (27-28) のような不完全倒置の受け身文が多い。

(27) Than **was <u>sir Lavayn</u> armed** and **horsed,** (Malory 661: 42)

(28) Than **was <u>the messyngere</u> brought** before kynge Marke.
(Malory 386: 12)

(27) も (28) も主語が be 動詞と語彙動詞の間に起こる不完全倒置の受け身文

であり、(27) の sir Lavayn も (28) の the messyngere も旧情報である。There に比べて than は新情報を担う要素を主語とする受け身文を導くことが少ないということが、than の後ろには完全倒置受け身文が少ないことの理由なのかもしれない。倒置語順と共に使われる than は新情報の導入場面で使われることも多いが、than は当然ながら導入以外の機能も果たすため、新情報を提示する機能を主とする there に比べると、それが導く受け身文においても新情報を担う主語が現れにくいと考えられる。

4．There 構文

本節では there 構文の情報構造を考察する。特に受動態の there 構文の語順と情報構造に焦点を当てて観察するが、その前にまず能動態の there 構文に関し、主に他動詞 there 構文を中心に動詞の持つ他動性という観点から検討する。続いて受動態の there 構文の語順と情報構造を考察する。

Malory において there 構文に現れる be 動詞以外の動詞は、殆どの場合 come などの非対格動詞である。しかし (29-31) に見られるように非能格動詞や他動詞の there 構文も少ないながら使用されている。

(29) So there **answerde a voice** that seyde to hym thus
(Malory 584: 21-22)

(30) ‘I told you that thys day there **wolde a knyght play** his pageaunte. …’ (Malory 455: 9-10)

(31) Also there **swore kynge Idres of Cornuwaile** that he wolde brynge fyve thousand men of armys on horsebake.
(Malory 17: 22-23)

(29-31) の there は全て明らかな副詞であるとは考え難く、虚辞とみなすの

が妥当と判断できるものである。(29) に先立つ部分では「ソロモンの妃が悪妻である為、彼は書物に女性のことを軽蔑して書いている」ということが述べられており、(29) は「そのようなソロモンに対して声が聞こえてきた」ということを意味する文である。従って there はある特定の場所を指しているとは考えにくい。また (30) は「今日は素晴らしい活躍をする騎士がいるだろうとあなたにお話ししました。」という意味である。サー・トリストラムの素晴らしい戦いぶりが展開される場面を目の前にしての発話であるので、there が漠然と戦いの場を指している可能性は否めないものの、'I told you that …' という過去形の動詞の目的語として埋め込まれたの節中に there が生じていることを考えると、この there を虚辞とみなすことは可能であると考えられる。(31) は前節の (14) について説明した際に述べたように、[than swore ＋ 主語] というパターンの繰り返しに続いて [there swore ＋ 主語] という形が繰り返し現れる部分からのものである。この場合も there が戦いの場を指す可能性があるとは思われるが、前述したように次々と王達が誓いを述べる様子を記述している部分であり、一人一人の王を場面に導入することがここでの there の主要な機能であると考えられる。

このように Malory においては虚辞とみなせる there 構文に非能格動詞や他動詞が起こっている。しかしこれらの文は新情報を導き、人や声の存在を述べたり、それらを場面に導入したりという機能をもつものであり、その意味においては、そこに表れる動詞は典型的な非能格動詞や他動詞とは異質なものとなっていると考えられる。また目的語の部分が担う情報の価値がある程度高いことも、情報構造の自然な流れを作っていると考えられる。このような要因が重なって、非能格動詞や他動詞も there 構文に起こっていたのであろう。

次に there の後ろに起こる受動態の文について考察する。前節で扱った than の後ろの受身文とは異なり、there の後ろでは完全倒置が多く見られる。

2.1 節で述べたように Bjørnsen and Heggelund (2006) によると、彼等が研究対象とした LME の資料の中に見られる倒置受身文の中で、完全倒置は 26,1％を占めるということである。またこの数値はもう少し後の時期までを扱った Bækken(1998:382) の研究結果（完全倒置は全ての倒置受身文の 28,4％）ともおよそ合致すると述べている。しかし there の後ろに起こる受身文に限って言えば、Malory における完全倒置の割合いはそれよりもずっと高いように思われる。(32-36) に示すような完全倒置の受身文は数多く起こっている。

(32) And anone there **was sente** unto them **two knyghtes of worship** (Malory 14: 21-22)

(33) And anone there **was brought** forth **two grete sperys** (Malory 33: 31)

(34) And so there **was made grete joy** (Malory 620: 40)

(35) there **was made grete sorowe** amonge all the astatis (Malory 94: 22-23)

(36) but there **was slayne** that morow tyde **ten thousand good mennes bodyes**. (Malory 18: 10-11)

いずれの例においても主語が [be 動詞 + 語彙動詞の過去分詞] のさらに後ろに起こっている。またこれらの受身文の主語は全て新情報であり、end focus の原則に沿った形になっている。主語に先行している語彙動詞は sente, brought, made, slayne であり、その中で (34-35) に現わる made はこの文脈においては意味の軽い動詞と言えるであろう。従って (34-35) においては動詞も含めた情報構造は「意味の軽いものから重いものへ」という流れになっていると考えられる。しかし (34) と類似した意味が (37) のような不完全倒置で表現されることもあり、意味の重さは必ずしも語順の選択の決定的な要因ではないように思われる。

(37) and there was **grete joy made** as couthe be thought.
(Malory 15:12-13)

その他の語彙動詞、sente, brought, slayne の意味の重さはどのように捉えるべきであろうか？少なくとも slayne のもつ情報価値は軽くないと考えられる。動詞の伝える情報の重さと新情報を担う主語の情報価値の関係を考えてみることは興味深いが、動詞の情報価値について客観的な判断基準を設定して考察することは今後の課題とする。

(32-36) のような完全倒置受身文の他、(37) や (38) のような不完全倒置受身文も there の後ろに起こる。

(38) And there **was sir Ulphuns horse slayyne** (Malory 18: 32)

(38) の主語である 'sir Ulphuns horse' の主要部は horse であり、これは新情報と考えられる。一方 sir Ulphuns は旧情報である。主要部以外の要素が旧情報であるこのような組み合わせは、情報価値において新情報と旧情報の間に位置すると考えられる。新情報を担う主語が語彙動詞の後ろに置かれる完全倒置の (32-36) とは違って、(38) では主語が語彙動詞に先行する不完全倒置になっているが、これは主語が全くの新情報を担うわけではないということにより説明可能かもしれない。しかし (34) と (37) が示すように、ほぼ同一の意味内容が完全倒置と不完全倒置の両方で表されていることを考えると、主語の情報価値が語順選択の絶対的要因であるとはみなしにくく、(38) のような文の語順について考察するためには、より多くの例文を精査し、語順に関わる様々な要因を探ることが必要と考えられる。

本節では非能格動詞 there 構文、他動詞 there 構文、そして there の後ろに起こる受動文について情報構造の観点から考察した。Malory においても

there 構文に起こる非能格動詞や他動詞は少ないが、情報の流れに自然に沿うような形であれば非能格動詞や他動詞であっても there 構文に起こることを観察した。また、受動文については完全倒置と不完全倒置を主に主語の情報価値から考察したが、この 2 種類の語順をより正確に理解するためには、動詞の意味の重さと主語の情報価値、また文の中でより後部に起こる要素の情報価値も考慮に入れて研究することが必要である。

5．まとめ

本稿では Malory を資料に than または there に導かれる文の語順を情報構造の観点から考察した。than の後ろでは be 動詞と非対格動詞の場合に倒置が起こりやすい。伝達動詞を除く非能格動詞や他動詞では倒置は起こり難いが、文脈により動詞に意味の漂白化が起き、非能格動詞としての性質が弱まったり、形式的には他動詞であっても、他動性の低い意味を表していれば倒置が起きることを示した。

there 構文についても、或る動詞が形式的に自動詞であるか他動詞であるか、また非対格動詞であるか非能格動詞であるかということよりも、その動詞が文脈において表す意味が there 構文のもつ導入機能に相応しいものであるかどうかの方が、この構文にその動詞が現れるかどうかを決定する重要な要素であることを観察した。

また than の後ろと there の後ろに起こる受動態の文についても観察した。there に導かれる受動文の方が than に導かれる受動文よりも完全倒置の割合が高いことは興味深い。これは there の主な機能が新情報を提示することであるのに対し、than はその機能が新情報の提示に特化したものではないということに起因しているとも考えられる。また完全倒置と不完全倒置という語順の違いは、主語の担う情報価値という観点から考察することも可能ではあるが、それ以外の様々な要因を考える必要があることを示した。

注

1. Pérez-Guerra(1999:107) によると、彼の資料において EModE の II 期から PDE にかけて there 構文におこる他動詞は全て受動態で現れているということである。
2. Martínez-Insua and Pérez-Guerra(2006) には、there 構文の定名詞句主語の指示対象が読者に新情報として再提示されていると解釈できるような、ME または EModE からの具体例は挙げられていない。
3. 非対格動詞は英語の歴史を通し、現代英語に至るまで倒置を起こしやすい性質を保っている。語順の歴史的変化を見えやすい形で浮き彫りにするため、非対格動詞はこの調査に含めていない。

資　料

Malory = The Works of Sir Thomas Malory, ed. E.Vinaver, London: Oxford Univ. Press. (1967).

参考文献

Bækken, Bjørg (1998) *Word Order Patterns in Early Modern English: with Special Reference to the Position of the Subject and the Finite Verb,* Novus Press, Oslo.

Bjørnsen, Catharina Hole and Øystein Imerslund Heggelund (2006) "Information Structure in Late Middle English Passives," *These Things Write I vnto Thee... – Essays in Honour of Bjørg Bækken,* ed. by Leiv Egil Breivik, Sandra Halverson and Kari E. Haugland, 61-82, Novus Press, Oslo.

Fludernik, Monika (2000) “Narrative Discourse Markers in Malory’s *Morte D’Arthur,” Journal of Historical Pragmatics* 1(2), 231-262.

Kemenade, Ans van and Marit Westergaard (2012) “Syntax and Information Structure: Verb-Second Variation in Middle English,” *Information Structure and Syntactic*

Change in the History of English ed. by Anneli Meurman-Solin, María José López-Couso and Bettelou Los, 87-118, Oxford University Press, New York.

Martínez-Insua, Ana E. and Javier Pérez-Guerra. (2006) "'There's Bjørg': on There-Sentences in the Recent History of English," *These Things Write I vnto The... – Essays in Honour of Bjørg Bækken,* ed. by Leiv Egil Breivik, Sandra Halverson and Kari E. Haugland, 189-211. Novus Press, Oslo.

Pérez-Guerra, Javier. (1999) *Historical English Syntax: a Statistical Corpus-based Study on the Organisation of Early Modern English Sentences,* Lincom Europa, München.

Warner, Anthony. (2007) "Parameters of Variation between Verb–Subject and Subject–Verb Order in Late Middle English," *English Language and Linguistics* 11.(1), 81-112.